

幻冬舎の本 香港生まれで東京育ちの アメリカ人の疑問

Text by Mika Kuboyama
Photograph by Hisayuki Enori, Yukitama Moro

樺山美夏・取材文 江森康之・写真
茂呂幸正・写真(挿物)



「赤く燃える空」 ジョセフ・リー 著 青木創 訳 ¥1,575 元コンサルタントならではの 視点で描く複雑な 人間模様をはらむ日本の空

Joseph Lee

香港生まれ。4歳から18歳まで東京で育つ。
シカゴ大学でMBA(経営学修士)を取得後、
米国四大会計事務所のパートナーとして
10年以上にわたり、
大手日系企業の経営戦略、
企業・不動産買収などの
コンサルティングを行ってきた。

「なぜ日本の空はアメリカのものなのか? そんな素朴な疑問からすべりは始まりました」
ビジネスコンサルタントとして活躍していたアメリカ人の著者が、処女小説の舞台に選んだのは日本。しかもその内容は、米軍基地返還と、逼迫している航空業界の買収劇という、極めて身近なテーマが絡み合った臨場感溢れるエンターテインメント小説である。
「東京の空は横田米軍基地の領空で、民間の飛行機が勝手に飛ぶことは許されない。しかも自分たちの国際空港は成田みたいな遠い所につくるなんておかしいですよ。でもその疑問に対してみんな答えられない。急成長するアジア経済の中で日本が勝ち残っていくためには、この不便な空港事情をまず何とかすべきだと思うのですが」
ではもし横田基地を国際空港として活用できたら? そんな彼の鋭い着眼点が、日米の航空業界再編に向けた男たちの戦いをスケールアップさせ、全と欲と権力の動きもダイナミックな読み応え十分のサスペンスを生み出した。
「ビジネスの世界ではやはり、最終的にお金の流れが大きな問題になるわけですが、世の中って白と黒だけじゃないですよ。結果が出るまでは限りなくグレーに近くて、そこには人と人との複雑な関係が介在している。最後の答えを選ぶまでのいろんな要素や背景はできるだけ描きたかった」
その辺りの微妙な駆け引きは、さすが元コンサルタントだけあって

アメリカ兵にレイプされた少女の自殺、大規模な反米デモ、横田基地周辺を買い占める不穏な動き、航空会社提携……。男たちの死闘と人間模様を鮮やかに描き出したデビュー作。



実際にリアルで説得力がある。そのうえ登場人物は男女ともに「マト」で個性的。時折出てくる日本人を揶揄したジョークは笑いを誘うなど、全体に流れる軽快で洗練された雰囲気は、著者自身のイメージにも通じているところがある。
「わりかた僕、皮肉っぽいはんですよ。コンサルタントなんでやってると、何事も「フイローゼ」になって見えないと「フイローゼ」になりますから。日系企業の方と話をすると「こは日本だから」という説明が多いんですが、どこでビジネスしようとするかはクイズですよ。日本人が「はいはい」と話を聞いてても、それが必ずしも「YES」を意味しているとは限らない(笑)。日本語がわかる僕でも、相手が言っていることがわからなくて、フラストレーションが溜まることもしょっちゅうありました」
そういう意味では、外国人からみた日本人像がわかって興味深いのだが、一番驚いたのはラストの「まさか!」の黒幕登場である。
「僕も自分でまさか!と思っただよな(笑)。喜んでもらえて嬉しいです。いくつかヒントがあるのでぜひ当たってみてくださいね」